「おかえり」の紙灯籠

宮城 震災遺構・大川小 卒業生ら企画

「亡き人も、今を生きる人たちも」

東日本大震災で児童74人が犠牲となった宮城県石巻市の震災遺構・大川小学校で14日、地元出身の若者らで作る「Team大川　未来を拓くネットワーク」が、紙灯籠（ちょうろう）に明かりをともす企画を初めて開く。亡き人も、今を生きる人たちもみんな、ふるさとに帰って来ますように――。そんな願いを込め、「おかえりプロジェクト」と名付けた。【百武信幸】

当日に向け準備する「Team大川　未来を拓くネットワーク」の只野哲也代表（右）とメンバーら＝宮城県石巻市の震災遺構・大川小で

団体は震災発生当時大川小5年生だった只野哲也さん（22）を代表に、当時の在校生や卒業生、震災後に同小の被災校舎保存を求める活動をともにしてきた若者らで結成した。「未来のいのちを救う」「子どもの笑顔を守る」など三つの基本理念を掲げ、震災の経験を基に、防災や災害後の子どもの心のケアの大切さを伝える活動に取り組む。

団体が外への発信と合わせ、大きな目標に掲げるのは「大川地区にコミュニティーを取り戻す」こと。地区は震災で子どもの数が激減したことに加え、同小周辺は人の住めない災害危険区域となったことで被災校舎以外は何もなくなり、住民が訪れる機会も少なくなった。地元を離れた人たちが帰るきっかけを作り、再生の一歩にしようと、お盆の帰省時期に企画した。

高知県の中学生らが寄せた紙灯籠のメッセージ＝仙台市宮城野区で

紙灯籠は、高さ約13センチのLEDキャンドルに文字やイラストを描いた和紙2枚を筒状にかぶせ、メッセージを浮かび上がらせる。震災前、児童たちが四つ葉のクローバーを見つけて喜んだ中庭に、震災当時の児童数と同じ108個の明かりでクローバーを形作るほか、空からも見える「おかえり」の文字や、校庭などに計360個の光をともす。

メッセージも、亡き人と今を生きる人に届くことを意識する。只野代表らが、防災講演で訪れた高知県黒潮町立大方中学校の生徒を始め、宮城県内の園児、埼玉や広島、福岡の若者ら交流のある人たちに呼びかけ、未来の夢や今大切にしている気持ちを文字や絵にしてもらったという。

「亡くなった子も、あの日を生き延びて今を生きる若者も、みんながメッセージをみて希望を感じてもらえたら」と只野代表。広報担当の佐藤周作さん（24）＝宮城県利府町＝は「亡くなった子どもたちに『楽しい未来を見せて』と言ってもらえるように、大川地区をよくしていくための第1回にしたい」と語る。

当日は午後5時40分に開会し、点灯は午後8時半まで。午後7時半からは報道撮影のない静かな中で鑑賞する時間も設ける。